

イギリス文学と映画化作品

はじめに

イギリス文学は、古期英語時代(大約 650-1150)を経てジェフリー・チョーサーで開花した中期英語時代(大約 1150-1500)、近代英語時代(大約 1500 以降)に大別できます。近代文学はさらにルネサンスとエリザベス一世時代(1558-1603)、ジェイムズ、チャールズ一世時代より王政復古期(1603-1700)、古典主義時代及び前ロマン派時代(1700-1798)、ロマン派運動時代(1798-1832)、ビクトリア時代(1837-1901)、19 世紀末及び 20 世紀初頭、現代に分類されます。

今回は中期英語時代のジェフリー・チョーサーから、今年(2017)ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロまで、イギリスの代表的な作家 32 人と各作家の映画化された作品を紹介いたします。なお、ここで紹介しました作家はイギリスの各時代の作家を網羅しておりません。また、紹介した映画化作品も映画化された全作品ではありません。

資料リスト

1. ジェフリー・チョーサー 1340?~1400

中世イギリスの最大の詩人で、近世英詩の創始者です。ロンドンの酒商の家に生まれ少年時代から宮廷に出仕しました。代表作は『カンタベリー物語』(1393~1400)で、この中には中世物語文学の全てのジャンルが結集しています。

2. ウィリアム・シェークスピア 1564~1616

イギリスの詩人・劇作家。イングランドのストラットフォード・オン・エイヴオンに生まれました。1582 年 18 歳の時結婚し、1592 年新進劇作家としてロンドン劇壇に現れました。作家生活 20 年程の間に戯曲 37 編と詩を 7 編創作しました。新進劇作家時代の作品は悲劇の『タイタス・アンドロニカス』『リチャード三世』、喜劇の『じゃじゃ馬ならし』『恋の骨折り損』『間違いの喜劇』などです。1595 年を前後して悲劇『ロミオとジュリエット』、喜劇『夏の夜の夢』『ヴェニス商人』の頃から円熟期に入り、世紀の変わり目に書かれた悲劇『ジュリアス・シーザー』、喜劇『お気に召すまま』『十二夜』の頃には劇詩人として完成の域に達していました。その後『ハムレット』『オセロ』『マクベス』『リア王』の四大悲劇を、続いて『アントニーとクレオパトラ』が書かれました。

3. ダニエル・デフォー 1660?~1731

イギリスのジャーナリスト、小説家。ロンドンの肉屋(蝋燭製造業とも)の子に生まれました。色々な職業につきましたが成功せず、1697 年頃から風刺詩などを書き始めました。60 歳に近づいた頃執筆した長編『ロビンソン・クルーソー』(1719)が代表作として名を不朽のものとししました。『モル・フランダース』(1722)は、女囚の子として監獄に生まれた女性の波乱万丈の物語です。

4. ヘンリー・フィールディング 1707~1754

イギリスの作家。父は軍人で 11 歳の時母を失いました。1728 年劇壇にデビューし、30 歳までは劇作家でしたが、生活のため弁護士になりました。のち、小説を執筆し英国小説の父と呼

ばれ、18世紀のイギリス小説を代表する作家といえます。代表作『トム・ジョーンズ』(1749)は、「正確な観察者には、人生はいたるところに滑稽なものを提供している」という自身の言葉にピッタリ合致します。

5. サー・ウォルター・スコット 1771～1832

イギリスの詩人・小説家。スコットランドのエディンバラに弁護士の子として誕生。弁護士になるが、物語詩をのちには散文物語を執筆しました。スコットの物語詩は、美しい叙景と華々しい叙述に満ちていますが第一流とはいえず、彼の本領は小説に在ります。『アイヴァンホー』(1819)は、中世イギリスが舞台でリチャード一世やロビンフッドが活躍する、恋と武勇の美しい物語です。

6. ジェイン・オースティン 1775～1817

イギリスの女流作家。父は牧師で一家は土地の名流でした。作品は明るい諧謔を交え、淡々と田舎住まいの若い女の結婚を語っています。また、ジェインはイギリス小説史上最大の芸術家と言われます。『高慢と偏見』(1813)は、主人公エリザベスの潑刺とした挙動と心理は比類なく、永遠の女性といわれています。

7. メアリー・シェリー 1797～1851

イギリスの女流作家。思想家・小説家のウィリアム・ゴドウィンの娘。1814年詩人のP・B・シェリーと大陸に渡り、彼の妻ハリエットが自殺すると1816年末にシェリーと結婚しました。夫の勧めで『フランケンシュタイン』(1818)などの小説を書きました。

8. チャールズ・ディケンズ 1812～1870

イギリスの作家。ディケンズは大衆的作家であり、生前に大きな人気を博しました。『ディビット・コッパフィールド』は自叙伝的要素を含むディケンズの代表作です。『オリヴァー・ツイスト』(1837-39)は孤児オリヴァーの人生を描いた、正義感と隣人愛に溢れた物語です。『大いなる遺産』(1860-61)は孤児ピップが大いなる遺産継承の当てが外れ、我を取り戻す話です。『二都物語』(1859)は歴史小説です。

9. シャーロット・ブロンテ 1816～1855

イギリスの女流作家。ヨークシャに牧師の娘として生まれました。周囲の荒涼とした自然に親しみながら成長しました。第二作『ジェーン・エア』(1847)は女性のひたむきな情熱を鮮やかに描いた青春文学の傑作で、主人公のジェーンは作者の分身です。彼女の小説も他の多くの女流作家と同じで自伝的で、創造というより告白の文学です。

10. エミリー・ブロンテ 1818～1848

シャーロット・ブロンテの妹です。無口で内気な性格で、鋭敏な感受性と独立不羈の精神を持っていたといえます。唯一の小説『嵐が丘』(1847)は、人間の激情を描いた悲劇的な小説で、イギリス小説史上最も独創的な傑作とされます。

11. トマス・ハーディ 1840～1928

イギリスの小説家・詩人。小説ではヴィクトリア朝後期の最高水準の作品を書き、詩は20世紀新風の先駆者です。『帰郷』(1878)は「土地の精神を呼び起こす点で、これをしのぐ英語の散文は一つもない」と評されています。『日陰者ジュード』(1895)は恋愛する二人の悲惨な人生の二重奏を極限まで追いつめた作品です。

12. ヘンリー・ジェイムズ 1843～1916

アメリカのニューヨークに神学者・哲学者の父の子として生まれました。30代以降はイギリスで活躍した作家です。アメリカでは20世紀のアメリカ文学は彼なしには考えられないといわれ、イギリスでは彼の出現で従来の小説観が一変したといわれます。ジェイムズの文学は難解で一般には十分理解されませんでした。20世紀文学の死命を制する大作家という定評は揺るぎません。

13. ブラム (エイブラハム)・ストーカー 1847～1912

アイルランドのダブリンで誕生。父・母は市庁の官吏。ダブリン大学在学中にダブリンの新聞社の演劇記者となり、当時の名優アーヴィングと親しくなり以後20年に渡り彼の劇団の経営に関わりました。その後1897年に『吸血鬼ドラキュラ』が刊行されるとイギリスの読書界に一大センセーションを巻き起こしました。

14. ロバート・R・ステューヴンソン 1850～1894

イギリスの小説家・詩人。灯台技師の子としてエディンバラに誕生。同地の大学で工学を修め、のち法律を学んで弁護士資格を得ました。小説のほか評論・詩・童謡なども書きました。主人公の名が有名な『ジギル博士とハイド氏』(1886)は二重人格の物語です。ステューヴンソンは我が国にもよく受け入れられ、ことに夏目漱石がその文体に心服しています。

15. オスカー・ワイルド 1854～1900

イギリスの詩人・小説家・劇作家です。アイルランドのダブリンに生まれました。父は医者、母は女流詩人で、オックスフォード大学在学中から耽美派の主唱者でした。『サロメ』(1892)は怪奇幻想と病的なムードを醸し出す、世紀末文学の代表になっています。

16. ジョーゼフ・コンラッド 1857～1942

イギリスの作家。ポーランド出身で、4歳の時ポーランド独立運動に参加していた父が逮捕され、両親とともにロシアの流刑地で暮らしました。1875年17歳の時から船員生活をし、1886年イギリスに帰化しました。1894年からイギリスに定住し小説を書き始めました。『密偵』(1907)は政治小説で、イギリスでロシア無政府主義者を見張る中年男を描いた物語です。

17. H・G・ウェルズ 1866～1946

イギリスの小説家・文明批評家。地方小商人の子に生まれ学校教師になりました。自然科学知識と自身の空想力を結びつけた『透明人間』(1895)、『宇宙戦争』(1898)などのSFや、軽妙なユーモア風刺小説を執筆しました。のち第一次世界大戦の直前頃から文明批評家として活躍しました。

18. ジョン・ゴールズワージー 1867～1933

イギリスの小説家、劇作家。裕福な弁護士の子としてロンドン郊外に生まれ、オックスフォード大学を卒業しました。世界漫遊旅行の後小説を書き始め、20世紀前半における第一流の作家として活躍しました。作品は第一次大戦前には積極的な社会批判の役割を果たしましたが、その後は激変する社会において取り残されたともいわれます。1932年ノーベル賞を受賞しました。『林檎の木』(1916)は青年の恋愛を回想形式で抒情的に描いた短編です。

19. ウィリアム・サマセット・モーム 1874～1965

イギリスの小説家・劇作家。父が長くパリのイギリス大使館で顧問弁護士を務めたためパリで生まれました。10歳で孤児になり叔父の牧師に引き取られますが、ここでの少年時代は不幸

でした。のち生活のため医師の資格をとり、20代から小説を発表します。『人間の絆』(1915)は自伝的長編です。第一次大戦では諜報勤務につき、この経験が元で『アシェンデン』が完成しています。『月と六ペンス』(1919)では画家のポール・ゴーギャンをモデルにその一生を描きました。この作品はアメリカと本国で驚異的なベストセラーとなりました。

20. E・M・フォースター 1879～1970

イギリスの作家。建築家の息子としてロンドンに生まれました。ケンブリッジ大学在学中に思想や芸術に目覚めました。代表作の『ハワーズ・エンド』(1910)は、知識階級の姉妹が傷つきながらも次第に人間的成長を遂げる女性版教養小説の傑作です。フォースターの作品は20世紀のイギリス社会を鋭く、沈着に、またユーモラスに観察して表現しています。

21. ヴァージニア・ウルフ 1882～1941

イギリスの女流作家。批評家レズリー・スティーブンの子として生まれ、早くから小説家を目指しました。ウルフの独創的な方法が開花したのは『ダロウエイ夫人』(1925)といわれます。この小説では中年婦人の生涯を一日の事件の中に集約して描いています。『オーランドー』(1928)は、16歳の少年が36歳の女性に性転換したという幻想的な伝記小説です。

22. D・H ロレンス 1885～1930

イギリスの作家。父はイングランドの炭鉱夫、母は元教師。大学卒業後小学校の教諭を務めました。最初の交際相手ジェシーと母とロレンスの3人心理的な関係が、ロレンスの人間思考の原形を作ったといわれます。1912年大学教授の妻で三児の母のフリーダと知り合い、のち結婚しました。1915年に『虹』を発行しましたが猥褻のため発禁処分となりました。『チャタレイ夫人の恋人』(1928)は恋愛小説です。

23. アガサ・クリスティ 1891～1976

イギリスの女流探偵小説家。作品ではフェアかアンフェアかで議論の絶えない『アクロイド殺人事件』(1926)が著名です。作中の最も有名な探偵はベルギー人のポアロで、もう一人ミス・マーブルも名探偵として知られています。

24. ジェイムズ・ヒルトン 1900～1954

イギリスの作家。ケンブリッジ大学卒業。作品はストーリーの変化に富み、物語性を持ち、独特のユーモアとペースがあります。1937年以降はアメリカに移住し、のち帰化しました。『チップス先生さようなら』(1933)は全寮制男子校の一人の男性教師の半生を描いた作品です。

25. ジョージ・オーウェル 1903～1950

イギリスの作家。税関吏の子としてインドに生まれました。ビルマで警察官になったものの植民地支配に嫌悪を感じ5年で辞職しています。パリで貧乏生活の後イギリスに帰り小説などを書きました。『1984年』(1949)は未来小説で、三大ブロックに分かれて絶えず戦争をしている世界の中で、非人間的な全体主義体制に反抗した主人公の末路を描いています。

26. イーヴリン・ウォー 1903～1966

イギリスの作家。オックスフォード大学卒業。父は批評家で出版社の社長。彼の長編小説は「まじめな」小説と「ふざけた」小説に分かれます。「ふざけた」小説では有閑階級の残酷な戯画を描き、笑いとユーモアと幻想を繰り広げ、最高傑作ともいえる『一握りの塵』(1937)もその系列です。「まじめな」小説の代表作は『ブライズヘッド再び』(1945)で、ここではイギリス上流階級家族の傲慢で危険な衰退を抒情的に描いています。

27. グレアム・グリーン 1904～1991

イギリスの作家。オックスフォード大学卒業。父はパブリックスクールの校長。1926年にタイムズの記者になり、のち『内なる私』(1929)で認められ作家生活に入りました。彼が作家としての地位を確立したのは『権力と栄光』(1940)で、『事件の核心』(1948)と『情事の終わり』(1951)は彼の名声を世界的なものとししました。

28. アステリア・マクリーン 1922～1987

イギリスの戦争・スパイ・冒険小説の作家。スコットランドの牧師の子。1941年イギリス海軍に入隊。戦後グラスゴー大学を卒業。在学中から執筆をはじめました。

29. ジョン・ファウルズ 1926～2005

イギリスの作家。オックスフォード大学を卒業。卒業後は教師をしながら小説の修行をしました。『コレクター』(1963)で著作に専念するようになりしました。『フランス軍中尉の女』(1969)はメタフィクション(小説についての小説)の代表的な作品として高く評価されています。イギリスのポストモダニズムを代表する作家の一人として評価されています。

30. アラン・シリトー 1928～2010

イギリスの小説家・詩人。貧しい労働者の家庭に生まれ、小学校を終えて職工となりました。その合い間に詩を書き、初著作の『土曜の夜と日曜の朝』(1958)で一躍「怒れる作家」として脚光をあびました。

31. ジョン・ル・カレ 1931～

イギリスのスパイ小説家。イギリス南部に誕生。16歳の時イギリスのパブリックスクールからスイスのハイスクールに移り、のちベルン大学に学びました。その後イギリスに戻りオックスフォード大学で法律を学びました。1961年西ドイツの首都ボンのイギリス大使館に勤務し、1963年からハンブルクの領事を務めました。これらの勤務のかたわら小説を執筆し、第三作の『寒い国から帰ってきたスパイ』(1963)で作家として認められ、勤めを辞して作家として自立しました。その後も『ティンカー、テイラー、ソルジャー、スパイ』(1974)、『ロシア、ハウス』(1989)、『ナイロビの蜂』(2001)、『誰よりも狙われた男』(2008)、『われらが背きし者』(2010)などを発表しています。

32. カズオ・イシグロ 1954～

日本人の両親のもと長崎市に生まれ、長崎海洋气象台に勤務していた父親がイギリスの研究所に赴任するのに伴い5歳で渡英し、1983年英国籍を取得しました。ケント大学・イーストアングリア大学で英文学・哲学・文芸創作を学んでいます。1989年の『日の名残り』では英国で最も権威あるブッカー賞を受賞しました。本作では英国のダーリントン卿に仕えた老執事ステューブンスが、第二次世界大戦後かつて共に働いたミス・ケントンに再会するため旅に出ます。ステューブンスは戦前の華やかなダーリントン邸で職務に身を捧げた自身と、現在の人生を交差させています。イシグロは2017年ノーベル文学賞を受賞しました。受賞理由は「感情に強く訴える小説で、世界とつながっているという我々の幻想の下に隠された闇を明るみに出した」とされました。

【参考文献】

『新潮世界文学小辞典』新潮社 昭和41年

『イギリス文学案内』朝日出版社 平成14年

『きまぐれな読書』富士川義之著 みすず書房 平成15年

